

令和3年度  
第3回 球磨川水系学識者懇談会  
説明資料

第2回学識者懇談会での主な意見

令和4年2月17日

国土交通省 九州地方整備局  
八代河川国道事務所  
熊本県土木部河川港湾局  
河川課

- 第2回学識者懇談会でいただいたご意見について、以下のとおり。
- いただいた意見を参考に、球磨川水系河川整備計画(原案)の作成を行っていく。

NO	委員意見
1	災害時のデータは貴重であり、確実にデータを取り、いかに残していくのかは重要である。水文データに加えて、土砂や流木も含め、検討してほしい。
2	(第2回資料4P22)報道機関が防災情報を円滑に取り扱えるように、平常時から意見交換に取り組んで意思疎通を図るべき。
3	(第2回資料4P27)コミュニティ形成への支援について、行政と住民が同じ方向を向いて進めるという視点で検討すると良い。
4	この河川整備計画の策定後には、自治体の総合計画など様々な計画に影響が及ぶと考えられる。自治体にも明確に伝わるように、球磨川の特徴が明確になるフレームワーク(構成)としていくべき。
5	(第2回資料4P6)「環境影響の最小化を目指す」という文言について、今は経済成長と環境保全を両立させる時代であり、公共事業による環境の劣化を前提にしない表現を検討すべき。
6	流域治水において、本川と支川の連携がわかるように、本川から支川をどう見ているのか、支川から本川をどう見ているのかといった考え方を河川整備計画に盛り込んでいくべき。
7	(第2回資料4P28)流域全体を視野に入れた取り組みについて、お題目で終わらないように具体的なアクションを始めてほしい。
8	令和2年7月豪雨の倒木は地面が滑ったことから発生したと考えられ、倒木から崩壊土砂量を想定すると、河川における堆積土砂の掘削に役立つ可能性がある。また、護岸欠壊についても、実態を踏まえて対策を検討することが重要。
9	令和2年7月豪雨を踏まえると、施設能力を上回る外力が働いたときにどういう事象になり、どう対応するかを深く考える必要があることから、河川整備計画においても、施設能力を上回る洪水への対応を明確に章立てすべき。
10	氾濫形態や地形を踏まえて、人的被害を防ぐハード・ソフトの対策を検討していくべき。
11	あらゆる関係者が協働する流域治水であり、推進の姿勢をしっかりと醸成していくことも考えていく必要がある。住民参加による河川管理の推進に具体例を書き込んでいくなど、姿勢の醸成を訴えていっても良いのではないかと。

- 第2回学識者懇談会でいただいたご意見について、以下のとおり。
- いただいた意見を参考に、球磨川水系河川整備計画(原案)の作成を行っていく。

NO	委員意見
12	沿川住民、市町村の自助共助の中で、「河川管理者もこう取り組むから皆さんも協力していただきたい」というようなことを平易な言葉で呼びかけるところがあっても良いのではないか。その意味で、分かりやすい説明資料も重要である。
13	(第2回資料4P6)河川環境に関する目標において、水質の観点が入っていない。清流球磨川の大きな特徴なので入れるべき。
14	河川整備基本方針にも記載されている本川及び川辺川における濁水の発生・長期化について、河川整備計画の中で対応していくべき。
15	(第2回資料4P16)流水型ダムの環境保全の取り組みについて、事後調査も含めて実施していくことが重要である。
16	流域治水を考えていく中では、流域の成り立ちを理解していくような教育を目指すべきである。流域大学構想において、林学を専門とする学科がある南陵高校や芦北高校との連携も進めていくと良い。
17	(第2回資料4P17,18)住民参加による河川管理の推進に関して、流域住民にとって豊かな空間や水辺の豊かさは環境だけでなく安全の観点からも恩恵であり、協力意識につながる。例えば、田んぼダムへの農家のご協力のように、整備と維持管理を連携させていく取り組みが計画に位置付けられると良い。
18	(第2回資料4P21)リスクコミュニケーションは大事であり、非日常と日常を連携させるような、治水と利水を連携して考えることが重要。防災教育と連携してまちづくり分野との協力も可能ではないか。
19	SDGsは流域住民の生活に直接かかわってくる問題であり、水・防災・地域づくりなどの項目も入っていることから、河川整備計画においても触れていく必要があるのではないか。
20	(第2回資料4P4)河川整備の基本理念に、環境の保全・創出・再生を明快に記載すべき。
21	(第2回資料4P15)都市計画の中に超過洪水対策を入れていくのも重要であり、施設能力を上回る洪水を想定した対策の中に、地域の都市計画や地域づくりとの連携を明快に記載すべき。
22	(第2回資料4P28)流域全体を視野に入れた取り組みについて、具体的に動く仕組みをつくることが重要である。
23	(第2回資料5P6)支川では、多自然川づくりに挑戦しやすいので、環境の保全・再生・創出を強く意識してほしい。